

タンチョウも住めるまちづくり検討協議会（第1回）

舞鶴遊水地を軸としたタンチョウも住めるまちづくりに向けて
「タンチョウも住めるまちづくり検討協議会（第1回）」を開催しました。

- 開催日時：平成28年9月6日（火） 15:00～17:00
- 実施場所：ロイトン札幌 パールホール（20階）
- 参加機関等：学識経験者、長沼町関連団体、北海道空知総合振興局、北海道地方環境事務所、長沼町、札幌開発建設部、日本生態系協会 等



協議会の開催風景

開会の様子

協議会は、委員（14名）と、町内外の一般傍聴者を合わせて約40名の参加のもと開催されました。

はじめに、長沼町の戸川町長より開会の挨拶があり、「新たな協議会が立ち上がることは、大きな一歩である」と期待が寄せられました。

委員による意見交換

事務局からのこれまでの取組経緯や先進事例の説明後、各委員において様々な視点から意見が交わされました。

- 地元商品のパッケージなどにタンチョウの名称を活用したい
- タンチョウの見守り方などルール作りが必要
- ツルとともに暮らしていた原風景を取り戻したい
- 長沼町だけでなく、流域全体の観点も重要 等

また、専門部会を設置し、より具体的に議論を深めていく必要があるなどの共通認識が得られました。

最後に、札幌開発建設部より「洪水時の治水機能だけでなく、地域の振興に寄与する遊水地にしたい」と意気込みが述べられました。



開会の挨拶
長沼町 戸川町長



北海道大学大学院
中村先生（座長）



専修大学北海道短期大学
正富先生



酪農学園大学
赤坂先生



舞鶴遊水地にタンチョウを
呼び戻す会 加藤会長



ながめ農業協同組合
成田組合長



長沼町商工会
中野副会長



長沼町観光協会
森下会長



マオイネットワーク広場
瀬川氏



㈱アクティブリック
見田社長



北海道空知総合振興局
藤島部長



北海道地方環境事務所
田口課長

第1回 タンチョウも住めるまちづくり検討協議会 議事概要

〔日 時〕：平成28年9月6日（火） 15:00～17:15

〔会 場〕：ロイトン札幌 20階 パールホール（札幌市中央区）

〔出席者〕：全46名（委員14名、報道機関6名、傍聴12名、随行者・事務局など14名）

【開会挨拶】 戸川町長（長沼町）

○（長沼町のこれまでの取組み概要を報告）

○新たな協議会が立ち上がることは、大きな一歩である。今後とも、舞鶴遊水地の一層の利活用が元気な地域づくりにつながることを期待。

【資料説明等】 事務局より資料を説明し、規約が承認。中村太士教授が座長に選任。

【意見交換】

■中村太士座長（北海道大学大学院 教授）

○協議会設立までに、地域の心配も含めて、多くの合意形成を図ってきた努力がある。

○様々な課題が想定されるなか、長沼町を良い地域にしたいという思いは皆一緒。協力して知恵を出し、解決策を検討したい。

■見田義之委員（株式会社アクティブリンク 代表取締役社長）

○地域活性化に関する取組みに対して協力が可能。

○環境と観光・経済、これらをどのように結び付けていくかが重要。

■瀬川明廣委員（マオイネットワーク広場）

○いろいろなことに興味をもち、様々なボランティア団体に所属している。

○長沼町は、野鳥の通り道であって観察するには素晴らしい場所。どうすればうまくタンチョウが生息するのかまだ分からないが、関心をもって協議会に参加したい。

■加藤幸一委員（舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会 会長）

○設立以降、日本生態系協会と勉強会を重ねてきた。豊岡の地元農業者とも意見交換した。

○多様な関係者を交えて、タンチョウをシンボルとした本協議会が設置されたことに感謝し、また期待をしている。

○遊水地において、地域の子どもが参加したイベント（9/3）では、子どもたちから「早くタンチョウが住むようになってほしい」という声があった。まさに、この言葉こそが

会が求めているゴールであり、時間はかかるだろうが頑張りたい。

■中野政光委員（長沼町商工会 副会長）

○タンチョウとそばをコラボさせ、長沼のそばは「美味しい」ということを広めたい。

○市民参加・企業誘致といった「地域づくり」の分野で協力していきたい。

■森下伸委員（長沼町観光協会 会長）

○大都市近郊で自然を味わえるといったことをPRしている。そのなかで、舞鶴遊水地をもっと活用する方法があると感じている。今までやっていない取り組みをしたい。

○朝は朝日が、夜は星空がキレイ。年間を通じてそのような素敵な地域にしたい。

○菓子店を経営しているので、お土産になるような商品化もしたい。タンチョウも含め、遊水地だけでなく長沼町全体、近隣の各市町村とも一緒に地域づくりをやれば面白い。

■成田正夫委員（ながめま農業協同組合 代表理事組合長）

○農業分野としては治水が基本であり、譲れない。

○個人的には、タンチョウがくらす環境で作った田んぼの米は、消費者に「美味しそう」と感じてもらえると思う。

○農作物への影響など懸念があるのも事実。地元の農業関係者の理解を十分に得ながら、皆で応援できる体制作りができれば良い。

■戸川雅光委員（長沼町長）

○タンチョウを一つのシンボルとして輪を広げて、長沼町が一体となってまちの活性化を図っていきたい。

○自然との共生には、メリット・デメリットがある。メリットが多ければそれだけ理解も進むと思う。

○長沼町の農業者は、工夫をしながら極力農薬を少なく、安全でよりおいしいものを作ろうと努力している。農業者ともよく相談し、理解いただきながら、取組んでいきたい。

■赤坂猛委員（酪農学園大学 教授）

○この事業は治水対策とともに、昔あった自然を復元する事業だと感じている。先に完成した舞鶴遊水地で、様々な案を議論し、ワイズユースされていけば素晴らしい。

○本検討は決して舞鶴だけの話ではなく、流域という視点を持って進めることで、31年度に完成する他の5遊水地にも広がりが見られる。

○タンチョウだけがメインに見える。共生会議の経験を踏まえると、他の水鳥も含めた（食

害などの)被害問題の検討が必要。生息環境専門部会をタンチョウ等専門部会として、被害対策も視野に入れた検討をしていく必要があると感じる。

■正富宏之委員(専修大学 北海道短期大学 名誉教授)

- 二つの部会は、相互に問題点や解決策の論議を共有する必要がある。
- 舞鶴遊水地だけで、タンチョウを継続的に生息させることはできない。流域の視点が必要。他の遊水地においても、徐々に検討が進んでいくと思うが、事業計画等にも影響があるため、前もって流域の視点を汲んで本施策を進めていただきたい。
- 8月に飛来したタンチョウは、3月に飛来したものと異なる可能性がある。あるいは大陸由来のツルかもしれない。
- カメラマンのマナー違反によるタンチョウへの影響が想定されるところ、むかわ町における「見守り隊」のような活動がツルの定着に非常に重要な意味を持っている。

■藤島京子委員(北海道 空知総合振興局 地域創生部長)

- タンチョウは地域資源。共生への取組みは、安全な土地で作られた農産品を提供できるという価値を生む。その過程で、ぶつかることも多く、それぞれの意見を大事にする必要がある。
- 北海道はまもなく150周年を迎える。実はその時代の石狩低湿地のエリアにはツルが住んでいた、鳥の楽園であった、そのような物語があると、環境との共生の重要性など施策の浸透性が増す。その観点からも、流域の視点を意識しながら、まずは舞鶴からスタートすることが大切だと感じる。

■田口和哉委員(環境省 北海道地方環境事務所 野生生物課長)

- 長沼町の地域の方々からタンチョウも住めるまちづくりを進めたいという発案があったのは、大変ありがたいことである。
- 農業被害の懸念や、一部のカメラマンのマナーの問題等、いろいろな課題があると思うが、課題解決に向けて環境省としてもできるところで協力していきたい。

■宮藤秀之委員(北海道開発局 札幌開発建設部 次長)

- 流域の視点は非常に重要と思います。本取組みで最も素晴らしいのは、地域の発案で進めてきたこと。国だけで進めても、施策はなかなか継続しないと思う。
- 経済効果や、観光、農業へのプラスの影響といった長沼の声を他の自治体に情報提供することで、同じように地域の声があがるよう取組んでまいりたい。
- 3月の夜明け前に遊水地に行くと、マガンの飛び立つ光景が見られる。ジェット機のよ

うな音がし、このような経験はここでしかできない。まさに観光資源である。夜明け前に遊水地に来るには、ながぬま温泉などに泊まることになり、そのような経済効果があると良いと考えている。

【閉会挨拶】 札幌開発建設部 千歳川河川事務所 貴家所長

○通常時から地域の皆様にしっかり使っていただき、遊水地を地域の振興に寄与するような施設にしていきたい。

○そのため、我々もしっかり調査をし、提示しながら、議論していきたい。

以上